

挿絵を伴わない『世界図絵』に関する一考察

井ノ口 淳 三

A Study of the Pictureless “*Orbis sensualium pictus*”

Junzo Inokuchi

Abstract

The book “*Orbis sensualium pictus (The Visible World by the Sense)*” by John Amos Comenius (1592~1670) was printed in Nuremberg in the year 1658. It is well known as the first textbook with many illustrations in the world. There are about more than 270 revised editions after the first publication. But some editions, which were published in 1770, 1847 and 1896 were pictureless. The purpose of this paper is to consider about the intent of some pictureless editions.

Key words : Comenius, *Orbis sensualium pictus*, Revised edition, Illustration, Textbook

1. はじめに

ヨハネス・アモス・コメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592–1670、チェコ語名ヤン・アモス・コメンスキー Jan Amos Komenský) の『世界図絵』 (*Orbis sensualium pictus*, 1658) は、「世界最初の印刷された挿絵入りの教科書」として教育史にその名を残している。筆者は近年チェコ、ドイツ、オーストリア、オランダ、韓国、オーストラリアなどの図書館で『世界図絵』の多くの異版本を閲覧・調査し、同書が「世界で最初のさわって動かせることのできる教材」であることを確認した。そして考察した内容を『コメニウス「世界図絵」の異版本』として公刊した¹⁾。ただし、そこでは「中間報告」と記している。というのは、1658年の初版以来世界各国で出版された270種類以上もの異版本の中には、まだまだ特徴のある版が存在しているからであり、それらの多くについての研究を尽くしていないからである。たとえば、『世界図絵』は表題にも示されている

1) 井ノ口淳三『コメニウス「世界図絵」の異版本』追手門学院大学出版会、2016年。

ように、各章に挿絵を伴っていることを最大の特徴としているのだが、異版本のなかには挿絵を伴っていないものがある。これはどうしたことであろうか。挿絵を伴っていない複数の『世界図絵』は研究の対象に値しないと思われているのか、それらに関する考察は世界の先行研究を見渡しても未だ行われていないように思われる。そこで本稿では、それらの中から 1770 年にウィーンで出版されたラテン語—ドイツ語 2 言語版と、1847 年に同じくウィーンで出版されたドイツ語—チェコ語—ポーランド語—セルビア語—ロシア語—フランス語の 6 言語版について検討し、挿絵を伴わない『世界図絵』が出版された意図は何なのか、なぜ挿絵を省略したのか、挿絵を伴わないことによる不都合は生じなかったのか、等々について考察する。

なお、ロシアに漂流した薩摩の青年ゴンザによって日本語に翻訳された 1739 年版も挿絵を伴っていないが、これは手書きの原稿であり印刷されたものではないので本稿では検討の対象としていない。

また、1896 年にズデーデン地方のライヒェンベルク Reichenberg で出版されたラテン語—ドイツ語 2 言語版は、初版の順序通りに記載されているものの、挿絵が全体の 5 分の 1 程度しかない。その上 2 つの章では挿絵の枠外に数字を付すという奇妙な体裁をとっており、挿絵の意義と役割を考察する上で見逃すことのできない重要な問題を提起しているので、この版についてもあわせて検討する。

2. 1770 年版の検討

本稿で最初に検討の対象とする版を 1770 年版と表記しているのは、ハイデルベルク大学の所蔵目録に従ったものである。しかし、実際に 1770 年に出版されたものであるかどうかについては確証がない。というのは通常なら扉にあるはずの発行年の記載が見当たらないからである（図 1 参照）。この版は、現在ではハイデルベルク大学のホームページから図書館へとリンクをたどり、オンライン検索で全文を読むことが可能であるが、筆者が 2014 年 3 月に図書館を訪ねて直接閲覧したものと当然同じものである。ハイデルベルク大学の以前の蔵書目録では「1962 年以前に出版された」ものの中に含まれる、として事実上「発行年については不明である」という見地を示していたのに、その後この図書館は何を根拠にして出版年を判断したのだろうか。これはあくまで筆者の推測であるが、おそらくウィーンのオーストリア国立図書館の判断に従ったものであろう。オーストリア国立図書館所蔵の文献にも出版年の記載は見当たらないけれども、扉に手書きで 1770 年と記載されており、所蔵目録でも 1770 年と明記されているのである。しかし、『世界図絵』の詳細な研究で知られるクルト・ピルツ（Kurt Pilz）は、「18 世紀の末か 1800 年頃」と推定して 1770 年説を認めていない²⁾。

2) Kurt Pilz : *Die Ausgaben des Orbis Sensualium Pictus Eine Bibliographie*, Selbstverlag der Stadtbibliothek Nürnberg, 1967. S.254.

JOAN. AMOS
COMENII

Orbis sensualium pictus, in Col-
loquia redditus.

Das ist:

Des Comens
Sichtbare Welt /
In Gesprächen
vorgestellet /

und

heraus gegeben von

Johann Georg Joseph Eischke /

Lehrer der Lateinischen Sprache

In der Kaiserl. Königl. Ingenieurschule zu
Gumpendorf vor Wien.

Nihil Adolescentibus utilius, nihil ju-
cundius Dialogis: nihil etiam pueris
præsertim, perinde necessarium. Jac.
Pontan. Soc. Jesu in Præf. Lib. Progym.

Und zu finden in Franz Leopold Grands, bür-
gerl. Buchbinders Gewölbe neben dem Hauptthore
bei St. Stephan.

図1: 1770年版 中扉

これらの経緯については、すでに筆者も説明しており、松岡弘教授も指摘しているので、本稿では省略する³⁾。

さて肝心の内容であるが、これも松岡が著者のヨハン・ゲオルク・ヨセフ・リシュケ (Johann Georg Joseph Lischke) 自身の説明を紹介しているように、「『世界図絵』全体を対話体に作り直し、ドイツ語文を本書の前半におき、ラテン語文を後半にまとめた」ものである (図2参照)。松岡は第1章と第35章を例にしてリシュケが教師と生徒間の対話・問答に作り変えた内容を説明した後、「本書はいわば、『世界図絵』の本文のみを借用して作られたラテン語学習用の一教材であり、コメニウスの『世界図絵』とは別物であろう」と述べている。松岡は本書をチェコ兄弟教団のカテキズムの系譜に位置づけ、本書の目的が母語のドイツ語から学習言語のラテン語への翻訳練習を対話文による問答形式で実施することにあつたので、挿絵が必須のもでなくなった、と結論づけた。なるほどカテキズムであるとするれば、問答形式で反復練習し、内容を暗記することが重要なのであるから、挿絵を必要としないわけである。しかし、それでは『世界図絵』の本文をわざわざ例文に取り込む必然性もなかったであろう。結局この挿絵のない版は、『世界図絵』の異版本としての魅力に乏しく、再び出版されることはなかったのである。

3. 1847年版の検討

次に対象とするのは、1847年に同じくウィーンで出版されたドイツ語—チェコ語—ポーランド語—セルビア語—ロシア語—フランス語の6言語版である⁴⁾。これはフレリッヒ (R.A.Fröhlich) の編集によるもので、チェコ語、ポーランド語、セルビア語およびロシア語というスラブ系の4つの言語を比較して一覧表の形にまとめ、すみやかに学習するための手引書・入門書として作成されたものである。

なお、本稿でセルビア語と表記している言語は、原著ではイリュリア語 (Ilirisch) と記載されている。これはナポレオンによる統治下に「イリュリア州」として支配されていたクロアチアにおいて使用された言語名のなごりである。ピルツによれば、セルビア語で書かれた『世界図絵』の最初の版であるとされている⁵⁾。また、当時のハプスブルク帝国は、主要民族だけでも10を超える多民族国家であり、それぞれの民族ごとに使用される言語も異なっていた⁶⁾。ウィーンで

3) 井ノ口淳三「18世紀ウィーンで出版された『世界図絵』の異版本について」『追手門学院大学心理学部紀要』第2巻、2008年。井ノ口、前掲書の第3章に所収。

松岡弘「第二言語教育における対話文・対話教育の意義と伝統について—チェコ兄弟教団のカテキズムとクラトフスキの『会話教本』、そしてコメニウスの『遊戯学校』から「挿絵のない『世界図絵』」までの風景—」『東海大学紀要 国際教育センター』第2号、2012年。

4) Hrsg.von R.A.Fröhlich, Wien, 1847. プラハ国立図書館所蔵。

5) Kurt Pilz; *op.cit.*, S.285.

6) 加藤雅彦『図説 ハプスブルク帝国』新装版、河出書房新社、2018年、78ページ。

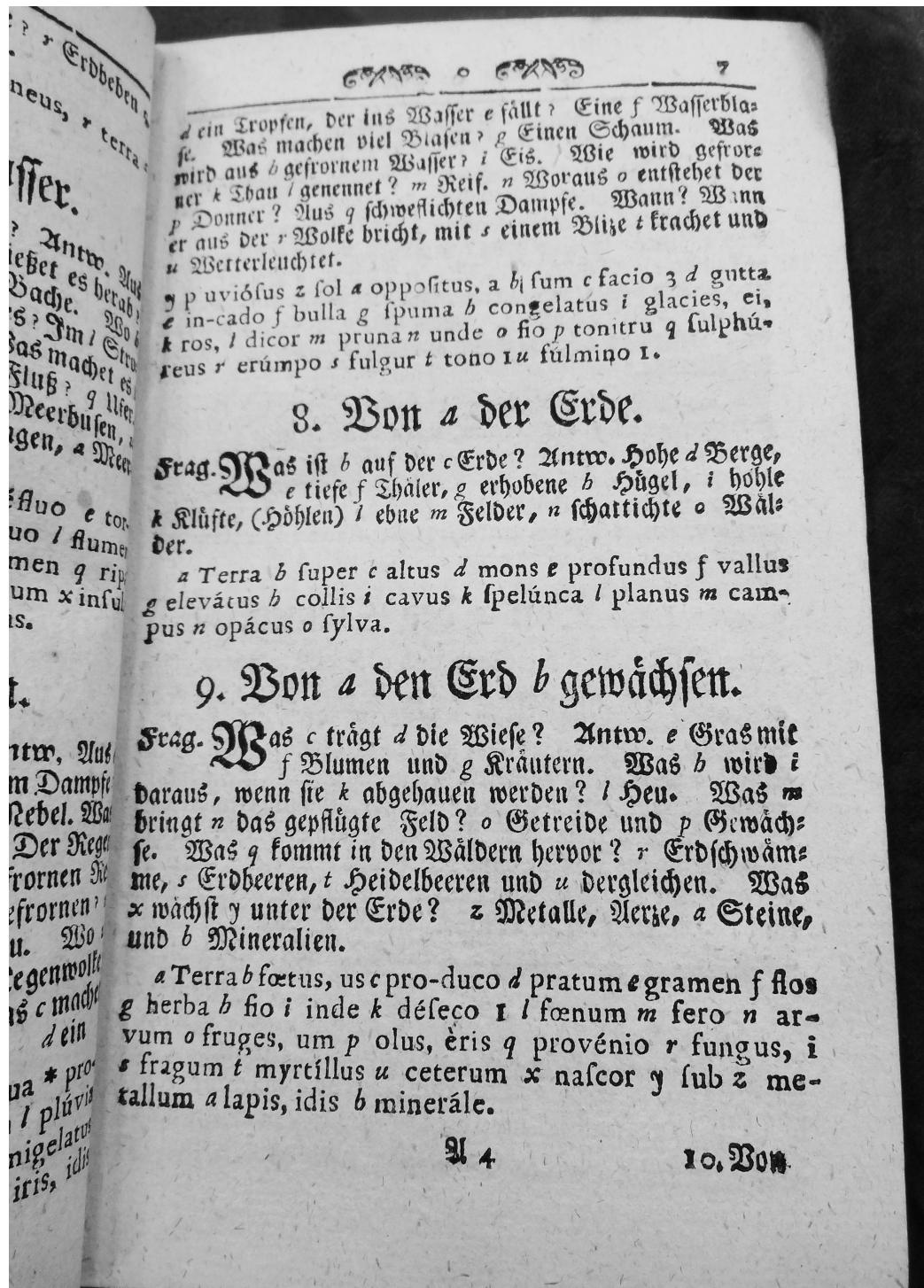


図2：1770年版 第8章 大地

このような多言語版が出版された背景には、そうした事情もあったものと推察される。

さて、この 1847 年版の内容であるが、全部で 151 ページある前半の 51 ページまでは、スラブ系の 4 つの言語についての、アルファベット、発音、そして名詞の格変化、形容詞、代名詞、動詞、前置詞、接続詞などの文法事項の説明である。

その後主要な単語が、「I. 教会(54 項目)」、「II. 自然(32 項目)」、「III. 天候と基本要素(37 項目)」、「IV. 時間(72 項目)」、「V. 月と曜日(20 項目)」、「VI. 祝祭日(29 項目)」、「VII. 鉱物(10 項目)」、「VIII. 色(9 項目)」、「IX. 植物、果実、花(46 項目)」、「X. 鳥類(26 項目)」、「XI. 四足動物(25 項目)」、「XII. 両生類(11 項目)」、「XIII. 害虫と昆虫(17 項目)」、「XIV. 人間の一部分(82 項目)」、「XV. 人間の情熱(53 項目)」、「XVI. 人間の病気(55 項目)」、「XVII. 人間の衣服(44 項目)」、「XVIII. さまざまな料理と飲み物(95 項目)」という順序でまとめられ、これらが 87 ページまで続いている。それぞれの単語の数を各グループごとに()内に示しておいたが、一番多いのは最後の「XVIII. さまざまな料理と飲み物(95 項目)」で、もっとも少ないのは「VIII. 色(9 項目)」である。これらの単語のグループと『世界図絵』の章立てとの間には特に関係はないし、グループ内での単語の順序もアルファベット順ではなく、編者のフレーリッヒがどのような基準で単語を抽出し、並べたのかについては不明である。

なお、この単語編からドイツ語が登場し、それぞれの単語は、ドイツ語—チェコ語—ポーランド語—セルビア語—ロシア語の順序に提示されている。そしてキリル文字で書かれたロシア語の横の欄にはラテン文字による発音が表示されている。たとえば、「ビール」という単語は、Bier piwo piwo pivo пиво という順序で示され、ロシア語の横に piwo と書かれている。ちなみに現代のチェコ語では piwo ではなくて pivo と表記される。

その後 88 ページから 91 ページまでは形容詞、92 ページから 97 ページまでが数詞、98 ページから 105 ページまでが動詞で、動詞だけはアルファベット順に単語が並べられている。さらに、106 ページから 109 ページまでが「はい」や「いいえ」などの副次的な単語、110 ページと 111 ページが接続詞となっている。そして 112 ページから 121 ページまでは日常生活における対話文の例文集、最後に 122 ページから 129 ページまでが詞華集となっている。

以上の文法事項や単語の後で、フランス語を加えた 6 言語による『世界図絵』がようやく登場する。しかし、「スラブ語文法の実践的な部分のための付録」とされているように、『世界図絵』はあくまで文法学習用の例文として用いられているにすぎない。「セルビア語とロシア語のオリジナルな翻訳を増補した」と記述しているけれども、6 つの言語のいずれもが「神」(第 1 章に相当)に始まり第 20 章に相当する「啼鳥」までで終わっており、コメニウスによる序文やアルファベット、および教師と生徒の対話の箇所も省略されている。実は原著では章の表示もなされず、ただ章題のみが記載されているだけである(表 1 参照)。そのため『世界図絵』とされる箇所は 131 ページから 150 ページまでしかない。その上 Comenius ではなくて Komenius と表記され

ているのである。コメニウスの出身地であるモラヴィア地方のワインにも *Komenius* という銘柄があるのだが、どちらも *Comenius* を名乗るには恐れ多いということだろうか。もっとも 20 世紀以降に出版された研究書の中にも書名に *Komenius* という表現を使用しているものがあり⁷⁾、それらの表記の意図については別に考察することが必要であろう（図 3 参照）。

それはさておき、本来 150 章あるべきはずのところが 7 分の 1 以下の 20 章までしかなく、挿絵も付されていないこの 1847 年版を、ピルツがなぜ『世界図絵』の異版本の中に含めているのか不可解である。おそらくセルビア語による最初の翻訳であることを評価したのであろうが、それはあくまで文法学習の例文として提示されているのであり、異版本の 1 つとして数えることには疑問がある。いずれにしても文法学習のための例文であるとするならば、日常生活の対話文や詞華集に挿絵を必要としないのと同じ理由により、『世界図絵』と称される箇所にも挿絵を必要としなかったのであろう。むしろ挿絵は文法学習にとって余計なヒントと考えられた可能性もあり、挿絵のない方が文法の学習上好都合と思われたのかも知れない。

表 1 1847 年版 目次

1	神
2	世界
3	天空
4	火
5	空気
6	水
7	雲
8	大地
9	大地の作物
10	金属
11	石
12	樹木
13	果樹
14	花
15	野菜
16	穀物
17	灌木
18	動物と鳥
19	家禽
20	啼鳥

4. 1896 年版の検討

20 世紀を迎える直前になっても出版意図を理解しにくい異版本が出版されている。1896 年にライヒェンベルクで出版されたラテン語—ドイツ語 2 言語版は、いろいろな意味で特徴のある版である⁸⁾。第 1 の特徴は、挿絵のある章が 150 の中の 32（入門と結び、アルファベット 2 種類を含めても 36 点）しかないということである。150 のすべての章について記述しつつも、このように挿絵の少ない版は他にはない。なお、原著では「CLI. 結び」と表記しているが、本稿では 1658 年の初版に従って 150 章までの本文と「結び」とを区別する。第 2 に、挿絵の付された章には必ず本文の末尾に聖書の引用が記されていることである。第 3 に、挿絵のない章の中には、章題の後本文は記述されずに聖書の引用だけのあるものや、挿絵の内容を文章で説明している章のあることである。第 4 に、章題のみしか記されていない章が 57 も有り、その数が全体の 3 分の 1 を超えるほど多いことである。そして第 5 の特徴は、「XCVII. 学校」と「CXXXVI. 少年の

7) *Johann Amos Komenius und Johann Valentin Andreae, ihre Pädagogik und ihr Verhältnis zu einander / vorgelegt von Max Möhrke*, Leipzig : E.Glausch, 1904. 京都大学教育学部図書室所蔵。

8) Hrsg.von Dr. Theodor Tupetz, Reichenberg, 1896. 九州大学中央図書館所蔵。

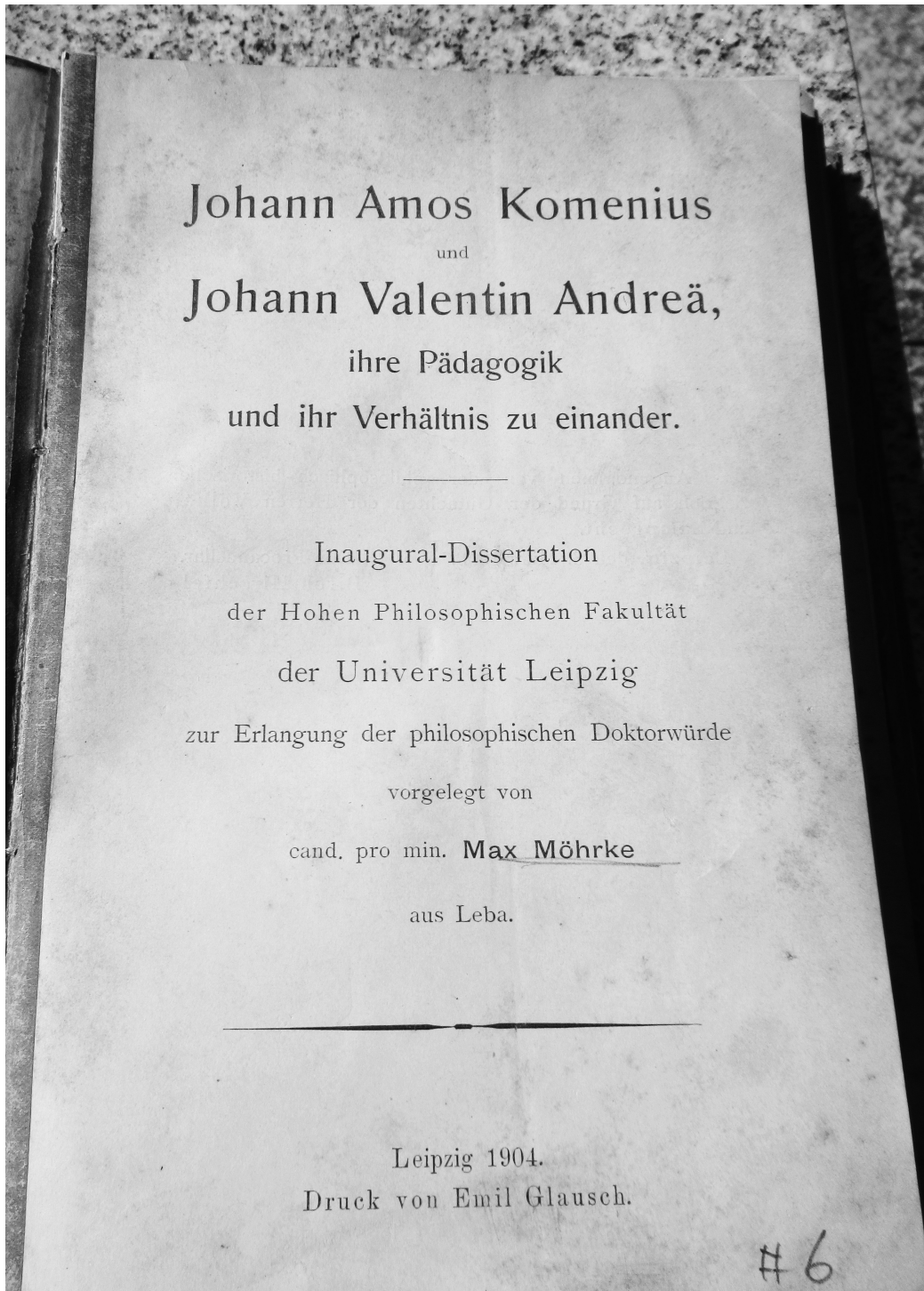


図 3 : Komenius 表記の表紙

遊び」の2つの章では挿絵と聖書の引用はあるものの、肝心の数字が挿絵の枠の外に記されていることである。以上のように多くの特徴のある版は大変珍しいものなので、以下順に検討していくことにする。

最初に挿絵のある章について検討する。最初の10章までは「I. 神」、「IV. 火」、「V. 空気」、「VI. 水」、「VIII. 大地」、「IX. 大地の作物」と6つの章で挿絵が付されているが、続く20章までは「XIX. 家禽」だけしかない。全体を50章単位で見えていくと、1章から50章までは16の章で挿絵があり、51章から100章までは12の章で挿絵があるものの、101章から最後の150章まではわずかに4つの章で見られるにすぎない。つまり全体を見渡しても部分的に見ても挿絵のある章とない章とはきわめてアンバランスな形で配置されており、なぜこの章には挿絵があり、別の章にはないのかという理由もまったくわからない。いわば編者のテオドール・トゥペツ（Theodor Tupetz）の恣意的な判断に委ねられているとしか思えないのである。

しかし編者には何らかの基準があったのではなかろうか。というのは、目次には挿絵のある32の章だけしか記載されていないからである。また、原著には編者によるものと思われる「ヨハン・アモス・コメニウス：その生涯と活動」と題する9ページの解説が付されており、その中に『世界図絵』に関する評価と挿絵についての認識が記されているのである。そこには『開かれた言語の扉』（*Janua linguarum reserata*, 1631）と『世界図絵』とを比較して次のように記されている。「（両者の）主要な違いは、すでに書名が示唆しているように、『世界図絵』には挿絵があることである。現代の絵本と比べるともちろんこれは不十分である。しかしコメニウスの時代にはそれはまったく立派な成果なのである。『世界図絵』は『開かれた言語の扉』よりもずっと大きな意義があり、コメニウスの死後も長きにわたって青少年のお気に入りの書物となっている。ゲーテも子どもの頃に愛読していた」⁹⁾。以上のように『世界図絵』における挿絵の役割についての認識は、通説と同様の内容で示されており、挿絵が必ずしも軽視されているわけではない。したがって、挿絵の選択についての疑問は改めて検討することにして、先へ進めることにしたい。

第2の特徴は、挿絵の付された32の章の中で「XXVII. 役畜」と「LXII. 靴屋」以外の30の章において本文の末尾に聖書の引用が必ず記されていることである。この2つの章にのみ聖書の引用が見られない理由はわからないが、聖書の引用自体は珍しいことではない。すでにコメニウスの存命中の1666年にニュルンベルクで出版されたドイツ語—ラテン語—イタリア語—フランス語の4言語版に見られるし、その後も1679年や1707年にも刊行されている。挿絵の意匠から推察すると、この1896年版は、1666年版に基づいて作成されているように思われるので、挿絵や本文と同様に聖書の引用もそれを踏襲すれば済むことなのである。

聖書の引用については第3の特徴とも関連するが、挿絵のない章の中には、章題の後本文を記

9) *Ibid.* S.8.

述せずに聖書の引用だけのある章が37もある。また、聖書の引用はないものの挿絵の内容を文章で説明している章が20あり、これらは「CI. 哲学」以降に集中している。さらに、「CIII. 天球」、「CXIV. 忍耐」、「CXVII. 寛大」、「CXVIII. 結婚」の4つの章は、聖書の引用と文章による挿絵の説明の両方が記されている。

以上の結果を整理すると、150章の中で挿絵のある章が32、聖書の引用のみが37、文章による挿絵の説明が20、聖書の引用と挿絵の説明の両方が4となり、章題のみしか記されていない章が57となっている。その数は全体の3分の1を超えるほど多い。これが第4の特徴である。それらのいずれの措置も判断の根拠が明らかでない。あえて大まかな傾向を見るならば、挿絵のある章と聖書の引用だけのある章は全体の前半に多く、文章による挿絵の説明のある章は後半に多く見られる。しかし、これも何かの意味を持つ分類とは言えない。要するに何をもって異なる描写をしたのかは、依然として不明のままである。

とりわけ奇妙なことは、「XCVII. 学校」と「CXXXVI. 少年の遊び」の2つの章では、挿絵はあるものの肝心の数字が挿絵の枠の外に記されていることである。このような異版本は他に例がなく、これが第5の特徴である。『世界図絵』の長所は単に挿絵があるだけではなく、本文中に付された数字と挿絵の数字が対応しており、それによって事物と言葉の対応関係を学ぶことができるように工夫されていることである。しかしこの1896年版の2つの章の挿絵のように、数字を挿絵の枠外に記すのであれば、それらの数字の意味はなくなってしまうのである。まったく不思議な行為と言わざるをえない¹⁰⁾。

しかし、枠外に記された数字の位置をもう一度よく見ると、2つの章とも関連する事物の近くに配置されていることがわかる。つまり枠外であるが、まったく見当違いの場所というわけではないのである。これら2つの章が「学校」や「少年の遊び」と題される章であることも偶然ではなく、比較的子どもが関心を持つ内容の章を選んでいる可能性がある。そして教科書としての活用の仕方としては挿絵で示唆された解答を教師が指示するのではなくヒントとして提示し、文章の内容について発問をして生徒に考えさせる時間を与えているとも推察できる。このように考えると、文章によって挿絵を説明している章が後半に多く見られることにも意味があるように思われる。

この版が19世紀末の1896年に出版されたことにも注意を向けねばならない。初版が出版された17世紀と比べると就学率も向上し、職業として教育に専念する教師も登場してきた。そして教師が一方的に知識を注入するという教育方法が必ずしも最良とは考えられなくなってきたのである。こうした時代背景を視野に入れると、編者の編集方針もおぼろげながら見えてく

10) これらの挿絵は、井ノ口、前掲書の90ページに紹介しているので参照されたい。なおそこでは「挿絵自体をきれいに見やすくしたとも推測できるが、実際のところその理由は定かではない」と記している。

る。編者が『世界図絵』における挿絵の役割を高く評価していたことはすでに紹介した通りである。しかし、19世紀末においては、もう少し別の形で挿絵を活用しても良いと考えていたのではないだろうか。つまり、挿絵の提示はあくまで生徒自身が考えるヒントとし、その程度に留めるのが良いと考えていたように思われる。現代の教科書には挿絵や図版が豊富に掲載されているが、それがかえって生徒の想像力を貧しくし、自ら考える力を弱めているという見方がある。編者のテオドール・トゥベツもそうした見方に通じるような見解をすでに持っていたのではなかろうか。このような推察に基づいて1896年版を改めて見直してみると、全体の5分の1程度の章にしか挿絵を掲載していないことや、文章で挿絵の内容を説明している章が後半に多いことも理解できるのである。何を根拠にして章の内容を区別しているのかという判断の基準は依然として不明のままであるが、編者にとっては章の形式を様々に変化させて多様な教育方法を適用できるようにすることに重点を置いていたのではなかろうか。

教育方法学の研究者である森脇健夫教授は、自らの学習体験と教育実践に基づき、中国語初級学習において、「絵単語」を使った「場面学習」が有効でないかと考えている。「絵単語」とは場面の中に主体の行動や関係を読み取るための「絵」の使用である、とされる。彼は次のように記している。『『世界図絵』を語学の教科書として見ると、教科書が想定する「用い方」をセットで考えることは当然である。ただ時代や社会の変化の中で、教科書の用い方が変わる可能性もある。挿絵を全体場面の中に配置したことについては現在から見ても素晴らしいアイデアだと考えるが、全体の状況の中で人間の行為や人間の関係性を読み取ろうとする場合には数字は必ずしも必要ではない¹¹⁾。

数字が挿絵の枠外に配置されている1896年版を読み解く場合、森脇の指摘から重要な示唆を得ることができる。つまり、19世紀後半のヨーロッパの学校における教科書の用い方や挿絵の利用方法について考えることが必要なのである。

5. おわりに

以上見てきたように、本稿では挿絵を特徴とする『世界図絵』の数多くの異版本の中からこれまで研究されてこなかった挿絵を伴わない版に注目し、1770年版、1847年版そして1896年版を選んで検討してきた。そしてそれぞれに挿絵を伴わずに出版された理由が異なることを見てきた。すなわち、1770年版はカテキズムとしての性格が強く、問答の暗記が重要であるため挿絵を必要としなかったこと、また1847年版は文法学習のための入門書として出版されたので、巻末の

11) 森脇健夫「書評：井ノ口淳三著『コメニウス「世界図絵」の異版本』」日本教育方法学会『教育方法学研究』第43巻、2017年。

付録である『世界図絵』の一部も文法学習用の例文として採用されただけであり、特に挿絵を必要としなかったこと、さらに 1896 年版になると、教師が挿絵を使ってすべてを説明するのではなく、挿絵はヒントに留めて生徒自身に考えさせるという方法意識から、挿絵を全体の 5 分の 1 程度しか掲載しなかったと推察できることを述べてきた。

『世界図絵』の異版本は、発行された時代によってそれぞれに異なる特徴を備えているが、挿絵を伴わない『世界図絵』も種類は少ないとはいえ同様の傾向が見られることを確認した。むしろ種類が少ないだけに、挿絵を伴わない理由の変化が 18 世紀、19 世紀半ば、19 世紀末という教育全体の変化と連動していることがよくわかるのである。その意味でこれまで注目されてこなかった挿絵を伴わない『世界図絵』の異版本の研究にも意味のあることを指摘しておきたい。

挿絵を伴わない異版本は、1738 年に出版されたラテン語—ドイツ語—ハンガリー語の 3 言語版など他にもあるが、それらの検討については他日を期したい。

付記：本稿は、2020 年 8 月 24 日から 28 日までの間ウェブ開催された日本教育学会第 79 回大会において報告した内容に加筆修正したものであることをお断りする。内容について参加者から「挿絵を伴わずに出版した意図として廉価で販売するということも考えられないか」という意見が出された。そのような意図も考えられるが、挿絵を伴わない版には魅力が乏しく、結果的に普及しなかったことを追記する。

なお、本稿の執筆に際して松岡弘教授からご教示をいただいた。ここに記してお礼を申し上げる。

(2020 年 9 月 18 日受理)